

「Gastrointestinal Pathology」

by Basil C. Morson, et al

東京大学医学部助教授

武 藤 徹一郎

1972年に第1版そして1979年に第2版が出版されたMorsonとDawsonの「Gastrointestinal Pathology」は、充実した内容に加うるに当時それに類する教科書がなかったためあって、数多くの病理医、臨床家に圧倒的な人気をもって迎えられ、計り知れないインパクトを与えてくれた。嬉しいことに、その第3版が、装いも新たにMorson & Dawson's Gastrointestinal Pathologyとしてこのたび出版された。

本書は、前版にならって検査法と検査報告、食道、胃、小腸、虫垂、大腸、肛門、腹膜の8章50項目から成っている。各章において正常、奇形から始まり、筋肉および機能的異常に次いで炎症性疾患、腫瘍性疾患の順に記載されている点は前版と基本的には差がなく、組織検査、病理報告をする際に病理医にとって必要な事項が第1章に親切にまとめられている。しかし、大幅に改訂されている項目が随所にあり、ほとんど様相を新たにした1冊の本になって

いる。

この10年間の消化器病学の目覚ましい進歩を反映して、執筆者の中にD. Day, J. Jass, A. Price, G. Williamsらの4人の若手が加わり、研究面に関連した多くの内容が書き加えられることになった。新版は従来のB5判からほぼA4判へと大きく様変わりし、頁数は748頁と少々少なくなったものの、2列式の記述であるために内容ははるかに豊富になっている。400枚余の美しく的確な病理組織写真が随所に配置されており、写真のサイズも大きく紙質も良くなったため第2版より質・量ともに充実した。新しい写真も増え、文献の数も4,800以上と第2版より大幅増となっているほか、かなりの部分が書き加えられたり書き改められたりしている。例えば腹膜の項が新しく追加され、食道炎、胃炎についての新しい知見が書き加えられた。小腸、大腸の項では、特に炎症の項が過去10年の進歩を取り入れてほとんど完全に書き換えられ、

AIDSの項も加えられた。大腸腺腫、大腸癌、潰瘍性大腸炎におけるdysplasiaの項にも新しい知見がしっかりと書き加えられ、その内容は組織学の記述のみにとどまらず、組織化学、免疫組織化学、分子生物学の分野にまで及んでいる。このように、時代の進歩に伴った消化器病理学に関する最新の内容が盛り込まれており、どこを取っても説明が簡潔で要を得ていて不足な所がない。言うまでもなく、本書は消化器病学の病理の教科書として極めつきの書であり、病理医のみならず消化器を専門とする臨床家、あるいはこれから専門家になろうとする臨床医にとっても、本書は常に正しい示唆と知識を与えてくれるに違いない。例によって格調の高い英語は読みやすく、英語の論文を書く際の手本になろう。

Bockusの「Gastroenterology」のごとく、このMorson & Dawsonの「Gastrointestinal Pathology」は永久に名著として残ることであろう。消化管を専門とするすべての分野の医師にとっての座右の書として推薦したい。

748頁 3ed A4判 1990年
定価 32,300円

Blackwell Scientific Publications

日本総代理店 医学書院 洋書部